

三河本苑の新役員・新体制の紹介

本苑長 加藤三樹

8月1日より本苑は新体制で再スタートしました。7月4日、新しく本苑総代になられた各機関の代表者が集まった臨時総代会で、次期本苑長として私を推薦していただきました。至らない私ですが、層一層努力せよ、との神様からの厳しいお声と受け取り、身が引き締まる思いでお役を引き受けさせていただきました。

新任された本苑役員は6名です。監事の金原孝典さん、峯澤由理子さん、特任宣伝使の三矢直さん、後継者育成担当参事で責任役員の野田庸子さん、教務担当参事で同じく責任役員の永田修三さん、そして宣教担当副参事の三矢千恵子さんです。なお部長の新任は8名です。添付組織表の下線の方です。

また今回、デジタル化推進部を新設しました。新設した理由は、1つは、対面や集団での活動が制約される今、オンラインでの情報発信が必須となって来ており、今後の新しい生活様式に対応するためです。もう1つは、令和3年度教団方針・人類愛善会活動方針に、インターネット宣教の推進が掲げられたことです。

これを受けて三河本苑の活動として、インターネットを併用して、祭典への参拝や行事への参加、宣教の推進、そして信徒間の情報・思いの共有を図っていききたいと思います。ただし推進に当たっては、「ツールはデジタル、心はアナログ」を心がけていきます。

新しいメンバー、新しい体制のもと、大本のみ教え、四大主義の中の進展主義と、統一主義である「大和合」で精進していきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

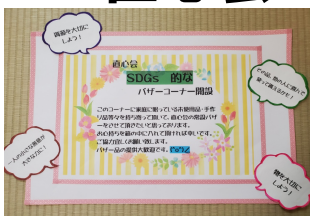
三河本苑組織表(令和3年8月1日～)

太字下線:新任の方

本苑長・相談役・監事 特任宣伝使・人類愛善会		次長・参事 (責任役員)		副参事		部長	
本苑長	加藤三樹			財務	杉山 孝	財務	杉山 孝
相談役	三浦 正博 野田 篤文	次長 事務局	牧 武	総務	外山 弥生	同和推進	外山 弥生
監事	金原 孝典 峯澤 由理子			本苑行事	牧 武	月次祭運営 芸術	高井 郁代
特任宣伝使	松永 孝司 芝田 豊海 三矢 直	次長 祭務局	河合 恭久	祭務	山口 稔起	茶道	横井 一男
人類愛善会 事務局長	河合 恭久			後継者育成	野田 実	祭務	調子 真二
		後継者育成局	野田 庸子			奏楽	磯貝 尚子
				直心会	野田 庸子	葬祭	本田 峰基
						青年部	三矢 磐直
						青松会 デジタル化推進	正)三矢 直彦 副)牧 良介
						直心会	野田 庸子
						みどり会	杉浦 宇多子
						編集	芝田 豊海
		教務局	永田 修三	宣教	生田 吉亮 三矢 千恵子	誠心会	三浦 浩
						宣教	生田 吉亮

お知らせ

直心会による献金バザーを開始



この度は、直心会による献金バザーを十月から毎月行います。
 今年は天地自然に優しい「SDGs(持続可能な開発目標)コーナー」を設定することになりました。皆様奮って未使用品を本苑迄お持ち頂くと共に、バザー献金をお願い申し上げます。

●11月の行事
 本苑十月月次祭
 ・総代会
 12月の行事
 ●5日(日)
 少年冬季学級
 ●19日(日)
 本苑十二月月次祭
 ・全体会議
 ●26日(日)
 誠心会万祥殿献労

【聖師様の愛善の道】
 田の面に実る稲穂をかがみとし
 へりくだりつつ世をばわたらん
 人間に私欲の念のなかりせば
 障壁もなく境界もなし

尊師さまに学ぶ

特任宣伝使 芝田豊海

真剣——交情——勤勉（前編）

「日出庵先生之旧稿（上巻）」より 昭和二年八月

凡て真剣にならないければ神明の感応はあるものでない。

宗教は必要だ。安心立命は、人生の根本要義だと口先ばかりで騒いでいる割に、真剣にこれを求める人がどれだけあるだろうか。

一時的の体面とか、義理とか名誉とかいうような、人間永久の生命の上より観れば殆んどとるに足らない些（ささ）いたる事に囚われ、小心翼翼として自己の神性それぞれ自らこれに縛りつけて、それより一步抜け出して自由無碍（じゆうむげ）の大世界に至ることを知らない連中ばかりである。

口をもたない人間に食物

をあたえることはできず、

先ず我れ眼を開かずして物を見る事はできない。真

剣に神を求めている人でなくては、真に神を感じることは到底できぬ。

ウカウカとその日その日を送っている人等（別に金持ちや権門の人を指しているのではない精神的に真の悶えの少ない人を云うのである）に、いくら神を説いたところで効果のある筈がない。

苦しんだ事のない人、悩んだ事のない人達には真剣味が欠けている。真剣味のない人には何一つ真箇（ほんと）のものができよう筈がない。況や神を認めることに於て、最

初より現界的に恵まれた人々は、不幸なのであり、平凡なのである。

○

概（がい）して上に媚（こ）むる傾向のある人は多くは下に辛（くる）み人である。

密の如き交わりは往々にして忽ち仇敵の間柄となり易い。昔から君子の交わりは淡きこと水の如しといつて、表面では如何（いかに）にもあつさりしているけれども、而（しか）も真に相互に理解し合っているから、決して洩（も）れることはない。

利によつて集まるものは、また利によりて散ずるのである。

家族の者は終日一所に居て一言も交（かわ）さなくとも、別に何のこともないが、他人同志となると、お互いに交（かわ）さぬ場合、ひがんでしまう場合

が往々ある。

家族の場合なら、双方とも水の様な気持で自由に伸々と打寛（くつろ）ぎ、自ら心に暗影（あんえい）を製造する様なことがないに反し他人となると、共に警戒し、遠慮し、悪く思われざらんと努めているのである。一寸した相手の素振りや言動でも、直ぐ自己を蔽（おほ）う暗影となり勝ちなのである。ここになると幼児（えら）いもので、一向求める処がないから、一向恐るる処がない。只心に感ずるままであるから、自己を欺（あざむ）かず、また決して他を曲解（きよ）つまい）しない。

心に秘密や、弱点のある人は疑心暗鬼を生じて、自分自身で勝手に心中に邪氣や暗影を製造して、そしてその為（ため）に脅（おそ）され、苦しめられているのである。

賢愚は別として、何となく一所に居て気持ちの裕（ゆた）かな人、取り付きは悪くても交際（つきあ）う程、味のある人、期した人は善人である。

つく

連載 大本のぼれ話

「死後につづく生涯」

特任宣伝使 松永孝司

「瑞祥新聞」大正13年7月25日

聖師曰く、死後高天原に安住せんとして、霊的生涯を送るということは、非常に難事と信ずるものがある。世を捨て、その身肉に属せるいわゆる情欲なるものを、いっさい脱離せなくてはならないからだという人がある。かくのごとき考えの人は、主として富貴より生まれる世間的物をしりぞけ、神、仏、救い、永遠の生命ということに關して、たえず敬虔（けいりん）な想念を凝らし、祈願をばげみ、教典を誦誦して功德をつみ、世を捨て、肉を離れて、霊に住うものと思っているのである。しかるに天国は、かくのごとくにして上りうるものではない。世を捨て、霊に住み、内に離れようと努めるものは、かえって一種悲哀の生涯を修得し、高天原の歓樂を損受することはとうていできるものではない。なんとすれば、人は各自の生涯が、死後にもなお留存するものなるがゆえである。

高天原に上り、歓樂の生涯を永遠に受けんと思えば、現世において世間的の業務を執り、その職掌をつくり、道德的民文的生涯をおくり、かくして後、はじめて霊的生涯を受けねばならぬのである。これを外にして霊的生涯をなし、その心靈をして、高天原に上る準備を完うしうべき途はないのである。内的生涯を清くおくと同時に外的生涯をいとなまないものは、砂上の樓閣のごときものである。あるいは次第に陥没し、あるいは壁落ち、床破れ、崩壊し、顛覆（てんぷく）するごときものである。